

「東アジア・中央アジア地域における歴史的都市の環境整備ならびに 保全ネットワークの構築をめざした情報基盤づくり」

研究代表者 慶應義塾大学 教授 三宅理一

1. 研究の目的

ユーラシアの中央部を貫く東アジアから中央アジアにかけての回廊地帯についての地域研究は、旧ソ連時代であったという制約もあって長い間未開拓の分野とされてきた。しかし、1990年代に入って旧ソ連の崩壊など、この地域の政治情勢が大きく変動し、国境を越えた地域交流、経済交流が一気に進んだことから、この地域に対する関心は一気に拡大し、我国における研究者の数も徐々に増えてきている。この地域はかつてシルクロードが栄え、また遊牧民による韃靼（ステップ）ロードが発展して独自の文明圏を形成していたが、今日の急激な都市開発の波の中で、それまでの地域色を色濃く残した歴史的環境が急速に失われていった。また、多くの場所で生態環境が危機に瀕している。

研究者は、1993年より旧ソ連から独立した中央アジア諸国を含め、カスピ海・ウラル山脈から中国・韓国を経て我国に到る圏域を対象として、当該地域の研究機関と共同して歴史的環境の保全と都市の持続性に関する議論を続けてきた。その結果は、昆明（中国、2003年度）、サマルカンド（ウズベキスタン、2004年度）、バクー（アゼルバイジャン 2005年度）と、対象地域内において毎年会議を開催してきた。本研究は、2006年9月のウファ会議を契機とする共同研究として組織され、ロシアのウラル地域を含む中央アジア東アジアの歴史都市ネットワークづくりと研究基盤づくりを行った。

本研究の内容は、東アジア・中央アジアの歴史都市を対象として、短中期的にその文化資源のデータベース化をはかり情報を共有することを目的としている。具体的には以下の内容からなる。

(1) ベース・マップの作成：

G I S（地理情報システム）を用いて地籍単位のデジタル・ベース・マップ（DM）を作成し、調査分析から得られる情報の入力に備える。

(2) 歴史資源の分布調査：

対象地区を悉皆的に調査し、G I Sを介してすべての建造物を地図（DM）に入力。その中で、歴史的価値の高い宗教建築、宮殿、公共建築、住居等の建造物、広場や街路、植生や水系等を個別のレイヤーとして重ねる。

(3) 土地利用調査：

対象地区の土地利用の変遷を追い、都市形成のプロセスがわかる形でG I S地図（DM）に入力。また自然環境についてもその現況と計画方針について明らかにする。

(4) 居住環境調査：

人口動態とあわせた歴史地区の居住環境を調査し、ライフスタイルと歴史資源の関係を解明する。

(5) 建築タイポロジー研究：

主として住居を対象にサンプル調査（実測調査）を行って建築類型を導き、比較検討する。

2. 研究の実施

(1) ベース・マップに関して：

当該地域の歴史都市を比較するにあたって、共通の情報を有したベース・マップは必要不可欠のものである。GIS（地理情報システム）を用いたベース・マップを用いれば、ひとつの地籍や建築物に対して、さまざまな属性情報を蓄積していくことが可能であり、それらをクロスオーバーさせながら多角的な分析を行うことができる。この特性により個々の建築の情報をGIS内にデータベースとして蓄積し、面的な情報として読み取る事により、新たな地域情報システムとして機能させる事ができる。特に歴史遺産を擁しながら変化を続ける都市域では、歴史的景観や街並みの保存を考える際に、地域性、歴史性はもとより、それに関わる様々な要素を総合的に分析していく必要がある。

東アジア中央アジア地域の研究に際して、ケーススタディ都市（各国で大小の組み合わせ）は、金沢、鎌倉、密陽、昆明、呼和浩特、赫図阿拉、カシュガル、サマルカンド、バクー、ウファ、スヴィヤスク、アストラハン等を対象として選び、順次作業を開始した。我国においては、歴史都市（金沢と鎌倉）を対象として、GISマップを作成している。

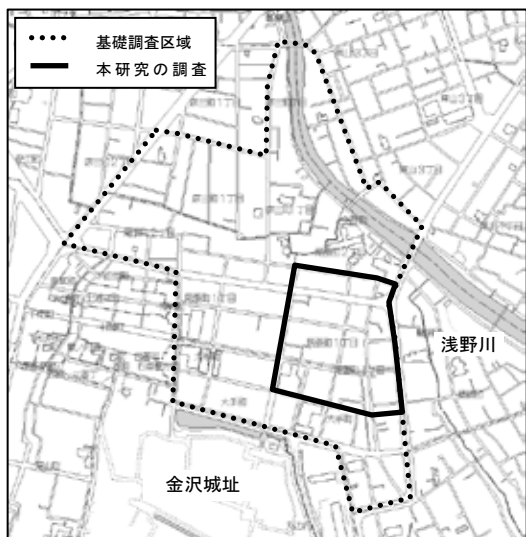
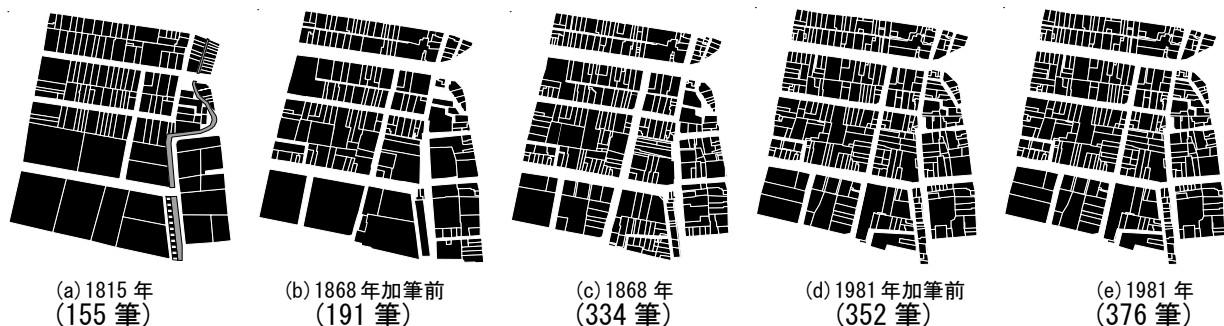


図1 研究対象地区

金沢においては中心市街地約750棟の建築物を対象として悉皆調査を行い、視認による外観の様式や意匠、構造上の特徴、登記簿による建築年代などを総合し、GIS建築物データベースを構築し、分析を進めた。藩政時代の建築は武家屋敷、町家に大きく分類することが可能であるが、近代に入って大正期から昭和初期に掛けて建設されている住宅の中には、武家的な意匠や町家的な意匠、洋風の意匠などさまざまな影響を受けており、近代和風など新たな類型を挿入した。また、敷地との関係、駐車場や塀などの状態を加味して、敷地のデータもインプットした。このようにして都市の中で個々の建造物

が有機的に発展、あるいはリサイクルされていく状態をデジタル・マップの中に再現する。



金沢における対象地区の地籍の変遷

中国においては、重慶大学のグループが四川省の歴史都市を対象にGISマップの作成を行い、その結果をウファ会議にて発表した。また、ウファにおいては日本（慶應義塾大学）とウファ市が協力して中心市街地と河岸地区の悉皆調査を行い、歴史と環境を包括するGISマップを作成した。このマップは、ウファ市の環境マスタープランのための基礎として利用されることとなる。

(2) 歴史資源について

中央アジアから東アジアにかけての歴史資源は多種多様である。都市というカテゴリーひとつを見ても、伝統的な都城のパターンから自然発生式の都市、あるいはオアシス型の都市や遊牧民との共生型の都市など、その歴史的背景によって空間の配置形式から住まい方が大きく変化する。2006年度の会議開催地がバシコルトスタン共和国の首都ウファであったため、異文化の衝突と溶融が大きなテーマとなった。実際、ウファの場合は「タタールのくびき」時代にバシキル人の集住が進み、15世紀には都市が形成されていた。16世紀にロシアが進出してクレムリンを建設し、正教徒のロシア人とイスラーム教徒のバシキル人との分離居住がなされたが、18世紀には隣のカザンと同様、統合された都市計画の下、「古典主義的」な都市デザインへと発展する。宗教施設としてのモスクや教会、シナゴグが共存し、さらに北方的な木造住居（ログハウス）が、都市の相貌をかたちづくってきた。かつてはカザンと並んで、もっとも北に位置するイスラーム都市であった伝統が、木造のモスクに残っており、都市のデータベースを作成する際には、この地域に特徴的な歴史資源として特に強調された。

本研究に参加する研究グループは、この「異文化の衝突と溶融」という観点から、それぞれの地域研究を進めている。たとえば、中国瀋陽のグループ（規設計画研究院）では、かつて満洲族の発祥の地としての瀋陽（盛京）に着目し、満洲八旗による八旗型の構造にモンゴルや漢族、回族の居住地が重なり、多様なエスニック・グループの受容を前提に都市

計画がなされてきた経緯が明らかになる。文明の十字路口といわれるアゼルバイジャンのバクー（アゼルバイジャン建設大学）では、ペルシア、トルコ、ロシアという大国に挟まれたカスピ海沿岸地域にて交易ルートの特質を生かした都市群が発展する様を提示した。アゼリ人のコミュニティを中心としながらも、ペルシア、アルメニア、ギリシア、チュルク系諸民族が混じり合った結節点の文化を生み出している。特に18世紀を頂点とするシェキ汗国の遺産は特徴的で、宮殿やキャラバンサライを核とした建築群が山並に囲まれて独自の景観をかたちづくっていた。今回のワークショップでは、それぞれ異なった方法ではあるが、こうした地域遺産と景観の問題が提出され、文化多様性に問題と重ね合わされて議論が行われた。



スヴィヤスク島のGISマップ（歴史資源の分布）

(3) 土地利用

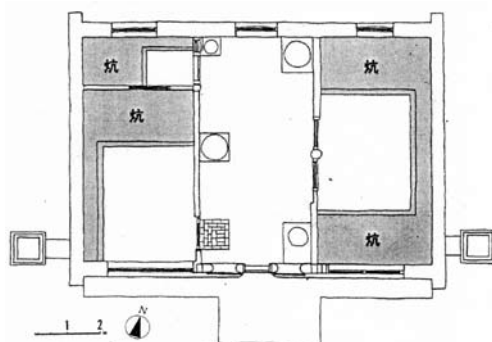
都市計画を論じるにあたって土地利用はもっと基本的な柱となるが、今回の作業は歴史軸の中で土地利用の変化を追い、それをデジタルデータとして共有することを目的としている。近代以前の段階では、多くの場合、身分やエスニック・グループによるゾーニングが一般的で、日本の城下町や清朝の八旗都市、朝鮮の城邑などはそのパターンを典型的に示す。逆に中央アジア一帯に分布するオアシス型の都市ではイスラーム法にもとづくワクフ制度などを下敷きとして交易と通過の自由が保証され、柔軟な土地利用がなされていたことは特筆に値する。

ウラル・ヴォルガ地域に位置するカザン（タタールスタン共和国）やウファ（バシコルトスタン共和国）の場合は、前者が歴史地区を中心とした遺産政策を展開しているのに対して、後者は環境政策を主体として河岸や森林などを取り込んだ土地利用計画をつくり上げてきた。今回の調査研究にあたっては、特に旧クレムリンを中心とした歴史的街区を取り囲む崖線の保全を前提とした土地利用調査がなされ、歴史と環境を統合した新たな都市計画の方法論が提示されることとなった。

(4)住宅のタイポロジーならびに居住環境

東アジアから中央アジア一帯は、乾燥地域からモンスーン地帯を横切ることもあって、住居の形態は大きく異なり、ライフスタイルも変化する。森林を擁する日本や韓国においては木造が主流であり、逆に良質な石材を産出するアゼルバイジャンでは石造が普通である。中央アジアの乾燥地域では日乾煉瓦が一般的である。中国山西省のように地面を開削した窯洞（ヤオトン）が普通の住まいとなっている地域も存在する。特徴的なのは、モンゴル等の遊牧民の存在で、定住せず季節によって移動する住居形式は、従来の住宅研究では俎上に上るものではなかった。かつてのバシキル人も同様に遊牧の民であり、自然環境に対する微妙な感性を受け継いでいる。

本共同研究参加グループにおいては、当該地域の住宅調査を経年的に行ってきたが、今回特に地域性とタイポロジーの関係に焦点を当て、歴史性や環境条件あるいは文化人類学的与件から、住居の形式がいかに導き出されていくかについての議論を展開した。瀋陽では、新賓満族自治県に保持される17世紀以来の満洲族の伝統住居（満族民居）の実測調査が行われ、アニミズム的な儀礼空間の残る北方系住居の特質が提示された。



赫図阿拉 満洲八旗の住宅（17世紀前半）

3. 国際ワークショップ

2006年度の中心行事であるロシア連邦バシコルトスタン共和国ウファにおける国際ワークショップは、「第5回東中央アジア歴史都市会議」として2006年9月15-16日にバシコルトスタン建設省が主体となってウファの国会議事堂内にて開催された。出席者は、日中韓露にアゼルバイジャン、ウズベキスタン、カザフスタン、フランスの8カ国に及び、地域開発、観光開発、環境と資源、自然環境、歴史と文化、ライフスタイルを軸として、計約40名が発表を行った。継続研究のテーマたる歴史性に加えて、ウラル地域特有の石油資源と自然環境に関する問題、あるいは文化多様性の問題を掘り下げて、各国からの発表と擦り合わせるようになった。

以下にそのプログラムを記す。



ウファと東中央アジアの関係

<9月15日>

挨拶： ムルファザ・ラヒモフ（バシコルトスタン共和国大統領）

基調講演：ハミット・マヴリヤロフ（バシコルトスタン共和国副首相・建設建築相）

菊竹清訓（建築家）

呂舟（清華大学建築学院副院長）

基調報告：三宅理一（慶應義塾大学教授）

リシャット・ムラギルディン（建築家）

S. A. ラフィコフ（サマルカンド市長）

セッション1-1 国土開発・地域開発の新たな方向

モデレーター：Nie Xiaoqing（重慶大学教授）

発表：スヴェトラナ・スミルノーヴァ（サンクト・ペテルブルグ「レニングラード

計画研究所」主任技師）

大内浩（芝浦工業大学教授）

崔 Moongyung（延世大学校教授）

ヌルマカン・トカエフ（アスタナ市建築監）

セッション1-2 ユーラシアの交通インフラと観光政策

モデレーター：李 Talwoo（Korea Cottrell Co.ltd 社長）

発表：李 Zexin（重慶大学教授）

芝山哲也+山木茂（大成建設）

アガサリム・アジゾフ（アゼルバイジャン建設大学教授）

<9月16日>

基調講演：金瑛燮（建築家）

新井清一（京都精華大学教授）

セッション2-1 環境都市のヴィジョン

モデレーター：ウラル・ウラクシン（バシコルトスタン共和国建築監）

発表：秦文軍（瀋陽市城郷建設委員会主任）

林明夫（JFE 常務執行役員）

紫藤悦雄（ガス&パワー・インヴェストメント株式会社常務取締役）

セッション2-2 緑と水の環境デザイン

モデレーター：ナムジット・マスキーフ（ウファ市建築監）

発表：石川幹子（慶應義塾大学教授）

アルフレッド・ペテール（ランドスケープ・アーキテクト）

趙万民（重慶大学建築学院副院長）

スヴェトラナ・バイムラトワ（バシコルトスタン石油大学博士候補）

セッション3-1 歴史遺産と文化多様性

モデレーター：益田兼房（立命館大学教授）

発表：アレクサンドル・ヴィクトロフ（サンクト・ペテルブルグ市建築監）

田島則行（建築家）

張敏（清華大学副教授）

ニザミ・ハッサン・ナギエフ（アゼルバイジャン建設大学教授）

セッション3-2 観光とライフスタイル

モデレーター：Hyuk Khang（慶星大学校教授）

発表：林玲子（政策研究大学院大学）

ムハマド・アハメドフ（サマルカンド建築大学副学長）

胡洋（清華大学技術主任）

イダール・サビトフ（バシコルトスタン石油大学教授）

出席者は、建築や都市計画、ランドスケープの専門家から、環境政策、交通計画、観光などに及び、個別の研究成果の発表と同時に、都市ガバナンスの観点から都市施策、地域計画、国際関係の詳細に及んでいる。ウラル地域は遊牧的な世界とオアシス的な文化の接点でもあったという歴史的背景を有し、豊富な石油資源とともにすぐれた自然環境を有し、将来的な環境コリドアの結節点として重要な位置づけとなる。また、ロシア帝国において初期の油田開発が行われたウファとバクー（アゼルバイジャン）との共通性も指摘されるなど、産業構造から歴史都市を見直す動きも登場した。

こうした議論を踏まえ、ウファにおける歴史環境都市会議を締めくくるにあたって、「ウファ宣言」がなされた。その内容は以下の通りである。

(1) ネットワーク化

ユーラシア諸国において都市問題に関わる国際プラットフォームを構築するために、関連する都市のネットワーク化を促進する。

(2) 環境政策

都市ならびに田園地帯の環境に関する再評価を下敷きに、ユーラシア諸国を貫く環境コリドアの構築が行う。

(3) ランドスケープとエコロジー

環境に対する詳細な研究を基盤として、エコロジーとランドスケープに都市計画に統合的に組み込む。

(4) 歴史遺産の保全と観光

遺産保護政策や観光開発にあたって、歴史資源、文化資源の評価を積極的に行う。

(5) 都市のイノベーション

イノベーションを特色とした技術とデザインを導入し、市民参加の原則を貫いて、既存の都市の改革ならびに再生を行う。

4. 結論と今後の展望

東中央アジア都市研究に関する総合的な都市研究はまだ始まったばかりである。旧ソ連圏における研究成果は、研究機関同士のコミュニケーションが限られていて、我国では十分に紹介されていないのに加えて、この地域がいくつもの国家に分かれた結果、さらに全体像を捉えにくくしている。しかし、ロシア国内における研究の蓄積は一定の考古学的成果をともなって、この地域の都市形成を相当程度明らかにしている。南のシルクロード都市に対して北方の韃靼（ステップ）ロードのネットワークは、モンゴル-タタール時代の基盤が下敷きとなっており、その遺跡の発掘の成果がさまざまなかたちで発表されている。今回の研究で浮かび上がってきたのは、中国からモンゴル、南シベリア、カザフ地域をまたいでウラル地域に広がる広域圏における文化の伝搬と都市（あるいは集落）形成の関係であり、漢字文化圏とは異なった圏域の意味が提示された点である。また、ロシア国内ウラル地域のイスラーム復興の動きが、過去の民族的背景を浮かび上がらせ、ロシア＝正教国家といった枠組みでは捉えられない都市像が浮かび上がりつつある。今回の会議とそのため都市研究は、文化多様性とエスニシティを軸とした歴史都市の価値を高めた点で大きな成果をもたらしている。

こうした歴史研究は、同時に今日の環境ガバナンスの問題に連なっていく。東中央アジア地域は、森林、山岳、砂漠といった広大な自然環境を有し、その中で諸民族や集団の生存圏が成立していた。このような環境の継続性を明らかにし、そこから当該地域を繋ぐ「回廊」の概念が提示された。東中央アジアのネットワークを支えるものとして、こうした歴史回廊や環境回廊の重要性が指摘され、関係者が共同作業による歴史と自然環境を軸にして横断する広域の地域像の構築が大きな課題となった。

こうした課題を踏まえ、2007年度の「第6回東中央アジア歴史都市会議」は新疆ウイグル自治区のウルムチで開かれることが決まったことを最後に申し添える。